

鹿児島県の課題を踏まえた体育科学習指導の在り方の検討

—ボールゲーム領域における実践—

當 房 省 吾 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

阿 部 大 亮 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Study of physical education teaching in light of problems unique to Kagoshima prefecture

TOUBOU Shogo · ABE Daisuke

キーワード：鹿児島県の課題、ボール運動系の領域、指導内容の明確化、運動教材の設定、動くイメージをもたせる指導方法の工夫

1 はじめに

本県では、自然・歴史・文化などの特性を踏まえた地域に根差した教育が盛んであり、「教學一如」という言葉で象徴されるように、子どもと教師が共に学び続け、よりより自己実現を目指そうとする優れた教育的風土がある。また、県の教育振興計画には、基本目標に「あしたをひらく心豊かでたくましい人づくり」を掲げられており、「知・徳・体の調和がとれ、主体的に考え行動する力を備え、生涯にわたって意欲的に自己実現を目指す人間」、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」という目指す人間像が明確に掲げられ、様々な施策が実施されている。

一方、昨今の社会情勢の中で、家庭や地域の教育力の低下、子どもの学ぶ意欲や学力・体力の低下、規範意識や倫理観の欠如など、多くの課題が指摘されており、本県においても、児童生徒の学力向上やいじめ、不登校等の問題行動への対応、特別支援教育の充実、高等学校の活性化、教職員の資質向上など取り組むべき課題が挙げられている。特に、各教科等における学力の向上に向けた授業改善は喫緊の課題となっている。

中でも体育科の学習指導では、これからの社会で、生涯を通じてより楽しくスポーツを実践し、様々な人やものとかかわり合いながら自らの人生を豊かで充実したものにしていくための力を培っていくことが求められている。これまでに、鹿児島県の「体育」に関する課題については、体力の低下や体力向上に寄与するための視点を検討した報告が多かった。一方、実際に体育授業をしている教師や体育授業を受けている子どもの側からの意見や感想などを基に、授業改善の視点を求め、体育授業の在り方を検討・実践した報告は少ない。そこで、本論では、体育授業をしている教師側から授業を実践する上での課題意識を探り、学習指導上の課題の要因を分析して指導改善のポイントを導き出すことや、授業改善においては体育授業を受けている子どもの側から、運動のおもしろさを問い直し、その魅力や特性を味わいながら学び合うことができる学習指導の在り方を検討することを目的としている。

2 本県における体育科学習指導の課題

本県における体育の授業について、子どもたちはどのように評価しているのでしょうか。図1に示されているのは、平成26年度の本県小学校第5学年男子における体育の授業の「楽しさ」についての評価である。「体育授業が楽しい」と感じている男子は、県平均76.7%であり、女子は60.0%であった。このことから、男子で約3割、女子で約4割は運動の特性や魅力を十分に味わい切れていないと捉えることができる。

また、教師は授業設計の上で何に力点を置いているのだろうか。図2は、県総合教育センターが実施した「授業に対する教師の考えを把握する意識調査」をまとめたものである。「1単位時間の指導過程で何を一番重視して、授業設計をしていますか」の問いに対して、多くの教師が「運動量の確保」と回答した。このことから、体力の向上に教師の力点が置かれており、「楽しさの実感」「コツの発見」「協力する場の設定」などを最も重視している教師は少ないことが分かる。

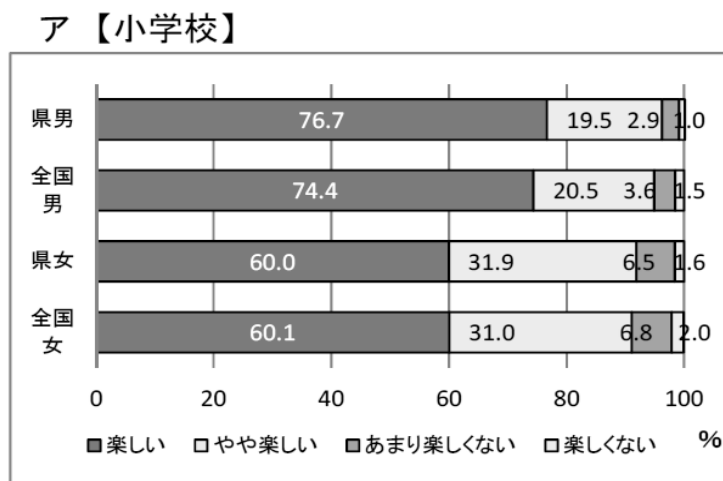


図1 体育授業の楽しさに対する評価（平成26年度 鹿児島県体力・運動能力、運動習慣等調査より）

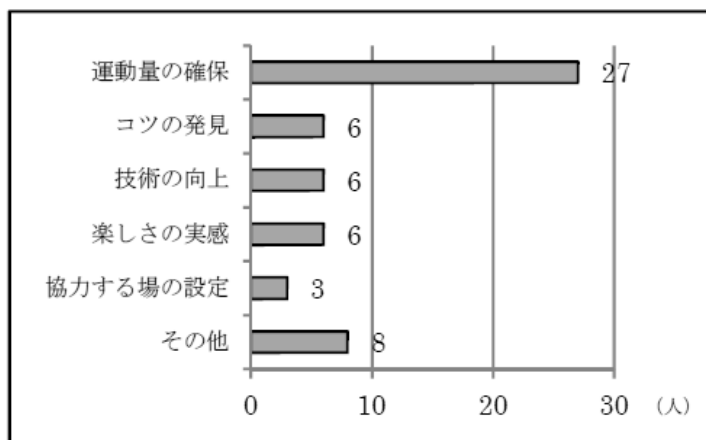


図2 教師の指導上の力点（平成24年度 鹿児島県総合教育センター指導資料より）

表1 学習指導面の課題とその要因

学習指導面の課題	課題の要因
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学ばせるべき内容が曖昧なため、問題解決的な学習が十分に展開されていない。 ・ 学習活動や場はあるが、学習内容が明確でない場合がある。 	<p>● 系統立てた指導内容の整理</p> <p>運動の特性や魅力を十分に味わわせるために、どの学年で、どんな内容を学ばせるのかといった系統立てた指導内容が十分整理されていない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 動きや技の構造、系統、ゲームの簡易化などを踏まえた運動教材が十分に設定されていない。 	<p>● 運動教材の設定</p> <p>指導内容を踏まえた運動教材設定の仕方が分からない。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども自身が動きを捉えながら課題を把握したり、解決方法を選択したりできるような学習が十分に展開されていない。 	<p>● 指導方法の具体化</p> <p>動きがわかったりできたりさせるために、動きを捉える観点を設定した学び合いなどの指導方法の工夫が十分でない。</p>

これらの課題の学習指導の面から考えると、表1のようにまとめられる。つまり、学習指導の改善には、系統立てた指導内容の整理や指導内容を身に付けさせるための教材設定の在り方、さらに学び合いを生み出すための指導方法の工夫に困難さを抱えていると考えられる。そこで、鹿児島県の学習指導の課題を受けて、授業改善のポイントを以下の3つの柱に整理した。

- **指導内容の明確化（何を学ばせるのか）**
- **指導内容を身に付けさせる運動教材の設定（何で学ばせるか）**
- **動くイメージをもつための5つの観点を活用した指導方法の工夫（どのように学ばせるか）**

本論でいう「指導内容の明確化」とは、2カ年で示されている小学校学習指導要領解説の指導内容の例示や子どもの実態を基にしながら、どの学年で、どのような内容を学ばせるかを、子どもの側から見た運動のおもしろさを手がかりにしながら系統立てて整理することである。

また、「指導内容を身に付けさせる運動教材の設定」とは、整理をした指導内容を身に付けさせる運動教材を設定していく道筋を明確にすることである。

さらに、「動くイメージをもつための5つの観点を活用した指導方法の工夫」とは、指導内容を運動教材を通じて身に付けていく際に、子ども同士が動くイメージをもち、相互のイメージを交流し合いながら学び合いを活性化させるために、5つの観点（力の入れ具合、タイミング、姿勢、位置、方向）を活用しながら「動き方が分かる」と「動くことができる」をつなぐための指導方法の工夫を図っていくことである。

つまり、「何を」「何で」「どのように」といったような3つの柱を大切にしていくことで、目標—内容—方法がつながった授業が意図的・計画的に展開されることが期待できる。さらに、そのことで体育の授業において子どもたちに味わわせたい運動の特性や魅力を教師側が分析することやねらいに近づくための教材を解釈することにつながり、よりよい体育授業の実践化が図られ、子どもたちの学びを深めることにもつながるのではないかと考える。

3 指導内容を明確にするための基本的な考え方

学習指導要領解説には、指導する内容が2学年で示されている。これらを、6年間を通して系統的に培っていくことに留意しながら、「どの学年」で「どのような内容」を指導するかを明確にすることが大切である。特に、体育の学習では、動きや技能を身に付けることを通して、思考・判断する力や意欲も高まる。そこで、まずは、身に付けさせる技能から指導内容を整理することにした。ボール運動系の領域においては、技能における指導内容が「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の3つの「型」で示されている。これは、生涯にわたって様々なスポーツ（球技）にかかわる可能性を考えると、種目固有の技能ではなく、「型」に共通する技能を系統的に身に付けていく大切さを示している。このとき、手がかかりにしたいことは、型に共通する動きや技能が、何のために、どうして必要なのか、また、それらがどのようにつながり、発展していくのかということである。

まずは、そもそも学習者でありゲームに参加するプレイヤーでもある子どもたちにとって、ボールゲームの何が面白いのかを問い直すことが必要である。このことに係わり、鈴木・廣瀬ら(2008, 2010)の研究知見を参考にした。鈴木・廣瀬ら(2008, 2010)によると、実際にゲームに参加しているプレイヤーの立場に立って考えてみると、まずもって意識されるのは、相手方との間で「何を競り合うのか」(＝競争目的)であること、また、ボールゲームの歴史の中で競争目的をめぐる競り合いにかかわる人々は、「結果の未確定性」を維持しつつ競り合いが行われるように配慮しながら、その直接的な対象となる課題(＝競争課題)を定め、それがやがてルールとして整備されてきたこと、そして、今日、広く知られているさまざまな技術・戦術は、この特定の競争課題を解決するために後から工夫された技法(＝競争方法)であることを指摘している。

さらに、どんなボールゲームにおいても常に①ボールを目的地に移動させること②プレイヤーが目的地まで移動すること2つのいずれかを目指しているとした。その上で、ボールゲームにおける競争課題の解決過程は、「的入れ」「突破」「突破+的入れ」「突破+進塁」の4タイプに大別されるとしている。一方、松田(2009)は運動固有の楽しさをボールゲームの局面で捉え、局面が1つしかない易しいボールゲームから、局面が3つある複雑なボールゲームへという配列が検討できると述べている。

これらのボールゲームに対する研究知見を基に、ゴール型における指導内容を明確にしていくことにした。まず、ボールゲームのおもしろさは、相手との「競い合い」であり、ゴール型では「ボール(自分)を目的地へ移動させる」ことが競争の目的であると確認した。次に、ゴール型の攻防の局面は「ボールを運ぶ」「相手をかわす」「的に入れる」という3つであり、この攻防の局面の中で生じる競争の課題を解決するために必要となってくる技能がゴール型共通の技能と捉えた。そして、学習の発展や発達の段階を考慮して、各学年(1～6学年)における指導内容を以下の視点で整理した。つまり、低学年では「ボールを運ぶ」という1つの攻防局面を突破していくための学習から、次第に「ボールを運ぶ」「相手をかわす」「的に入れる」という複数の局面が混在する状況を突破するための学習へと発展していく。さらに、各学年で整理した指導内容を身に付けさせるために、単元の中で生じる子どもの「つまずき」を想定し、中核となる学習課題を設定した。以上の考えを基に、ゴール型の指導内容を明確にする道筋を以下の図3にまとめた。

4 指導内容を身に付けさせる運動教材の設定

(1) 指導内容を身に付けさせる運動教材の設定の基本的な考え方

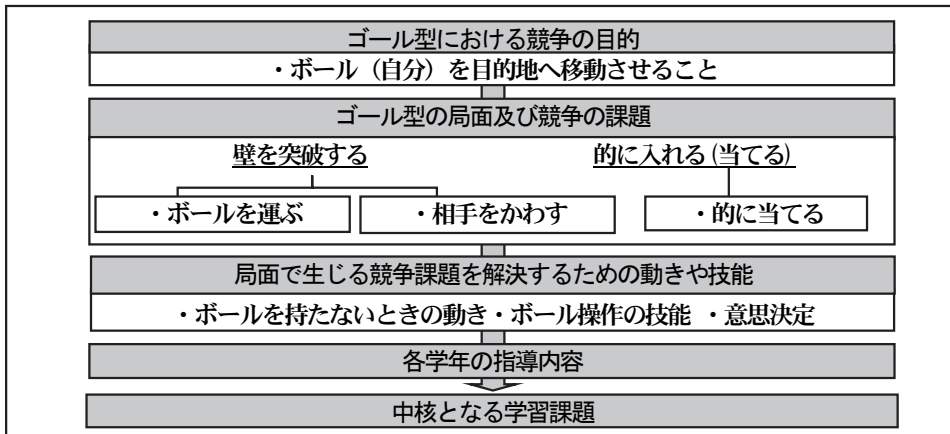


図3 ゴール型における指導内容の明確化の道筋

運動教材の設定を行うに当たって、岩田（1994）の教材づくりの過程とその内容的・方法的視点を参考にし、図3の過程で設定した。その際、以下の2つの視点を考慮した。1つ目は、前述の中核となる学習課題を含んだ内容的側面である。2つ目は、子どもの実態、学習機会の平等性、おもしろさの確保に留意し、学習意欲を高めることが可能かといった方法的側面である。この2つの視点を基に、素材を加工・修正することで、より効果的な教材を設定することが可能になる。また、このことは、学習指導要領解説にも述べられている「易しいゲーム・簡易化されたゲーム」を設定することといえる。

(2) 指導内容を身に付けさせる運動教材の設定の実際

表2は、学習指導要領解説の高学年のゴール型の指導内容を5・6年の系統を意識して整理したものである。それらを基に第5学年のゴール型における教材設定を図4のように行った。

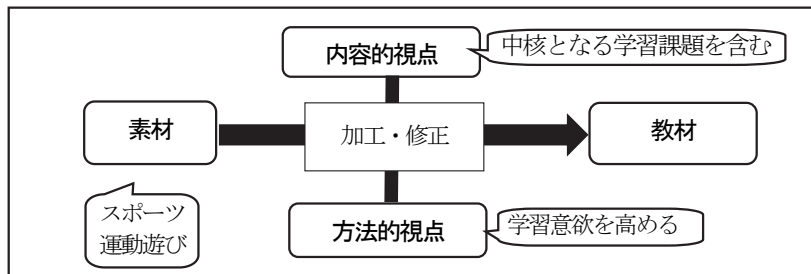


図3 教材づくりの過程と基本的視点

表2 第5・6学年におけるゴール型の指導内容

学年	5年	6年
態度	① ゴール型ゲームに進んで取り組むことができる。 ② ルールやマナーを守り、友達と助け合って練習やゲームをすることができる。 ③ 用具の準備や片付けで、分担された役割を果たすことができる。 ④ 場の危険物を取り除いたり場を整備したりするとともに、用具の安全に気を配ることができる。	
思考・判断	① ゴール型の楽しいゲームの行い方を知っている。 ② プレイヤーの数、コート広さ、プレー上の制限、得点の仕方などのルールを選ぶことができる。 ③ 効果的な攻め方を知り、チームに合った攻め方を選ぶことができる。	③ チームの特徴に応じた攻め方を知り、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てることができる。
技能	① 近くにいるフリーの味方にパスを出すことができる。 ② ボール保持者からボールを受けることのできる場所に動くことができる。 ③ 得点しやすい場所に移動して、パスを受けてシュートなどをすることができる。	④ 相手にとられない位置でドリブルすることができる。 ⑤ ボール保持者とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。

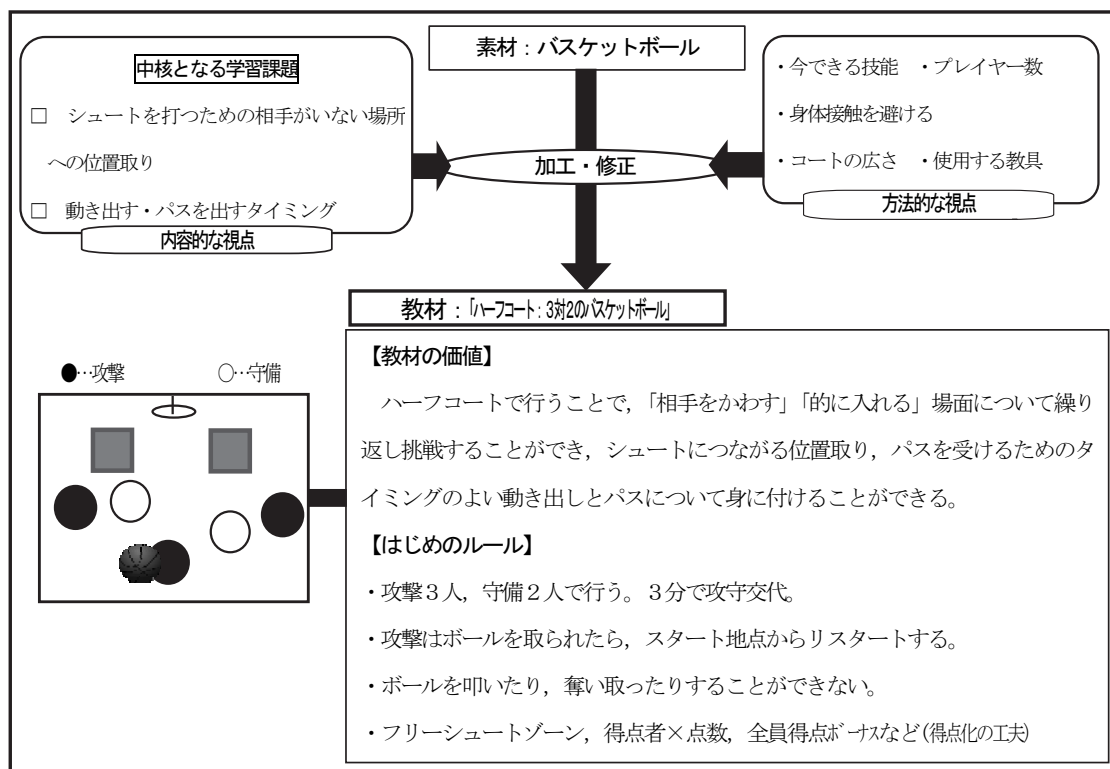


図4 指導内容を身に付けるための運動教材設定の道筋 (第5学年)

5 動くイメージをもつための観点を活用しながら動きを高める指導方法の工夫

運動の特性や魅力に触れながら指導内容をより効果的に身に付けるためには、子ども同士が自分や友達の動きを捉え、動くイメージを基に互いに助言や補助しながら学習課題を追究できるようにすることが大切である。そこで、私たちは、動くイメージをもたせるために5つの観点(力の入れ具合、タイミング、位置、方向、姿勢)を設定して、これらを基に「動き方が分かる」「動くことができる」ようにするための指導方法を工夫することにした。そして、5つの観点を子どもが自ら活用し課題解決できる姿を目指し、6年間を見通して教師は表3のように働きかける。

表3 動くイメージを活用させるための教師の働きかけ

低学年	中学年	高学年
工夫・改善している子どもの動きを観点で価値づける。	課題解決の視点として、観点を設定する。	課題解決の視点として、どの観点をいれればいいか選択させる。

6 第5学年 ゴール型 単元「ルールを工夫したバスケットボール」の授業実践

これまで述べてきた考え方を基に実践を行った。この実践は、第5学年単元「ルールを工夫したバスケットボール」(全10時間)で行った。

(1) 実践の基本的な立場

ここでは、授業のポイントが目標を達成する上で有効だったのかを検証するために5学年で実践を行った。

指導内容 (中核となる学習課題)	<input type="checkbox"/> シュートを打つための相手がいない場所への位置取り <input type="checkbox"/> 走り込む・パスを出すタイミング
教材	<input type="checkbox"/> ハーフコートの3対2のバスケットボール <input type="checkbox"/> ドリブルなし <input type="checkbox"/> アウトナンバー <input type="checkbox"/> フリーゾーンの設定
指導方法	<input type="checkbox"/> シュートを打つことができる位置や走り込む・パスを出すタイミングが分かる, 分かっていたことができるようにするための指導方法の工夫

(2) 目標及び指導計画

「みんなが活躍できるゲームにしたい」などの思いや願いをもって、友達と協力して練習やゲームに取り組み、ボール保持者からパスを受けることができる場所に移動し、パスを受けてシュートすることができる。

時間	1	2	3	4	5	6・7・8	9・10
過程	つかむ・見通す	挑戦する・工夫する				生かす	
課題の追究過程	試しのゲームをして、みんなが楽しめるバスケットボールの学習計画を立てよう。 シュートを打つことや得点することができなかった。 ルールの工夫や動き方の学習が必要になってくるぞ。	クラスみんなが楽しめるバスケットボールにしよう。 みんなが楽しめるルールをつくらう。 → シュートを打つには、どのように動けばよいのだろうか。 → どのような攻め方を選んで、攻撃すればよいのだろうか。					バスケットボール大会をしよう。
		準備運動 ドリルゲーム	ゲームⅠ タスクゲーム	話し合い 作戦	ゲームⅡ メインゲーム	整理運動 振り返り	○トーナメント戦 ○学習のまとめ 「価値付ける内容」 ○協力 ○ルール・作戦の工夫 ○観点のよさ ↓ 生活の中で進んで運動に親しんでいく姿
態	④	③	②		①		
思	①	②					③
技				①		②	③

評価欄の番号は、表2の指導内容と同じ

(3) 本時の実際 (シュートを打つための動き方を身に付けた3~5時を中心に)

【3/10時: シュートを打つための位置取りについての課題解決】(動き方が分かる)

シュートできた画像と、できなかった画像では、何が違うかな。

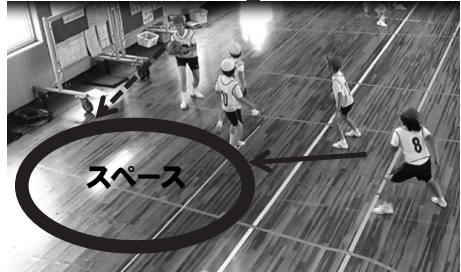
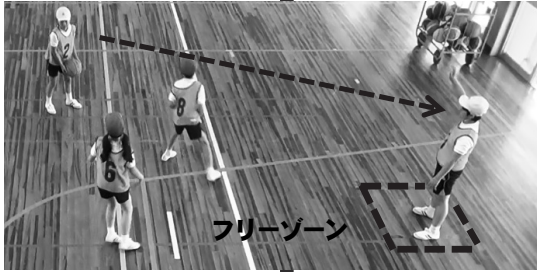
打てなかったときは、敵が近くにいる場所
でパスをもらっているよ。

比較

打つことができたときは、空いている場所
でパスをもらっているよ。

なるほど、シュートを打ちやすい場所があるということかな。

シュートを打つには、どんな場所(位置)でパスをもらえばよいのだろう。



ゴール下に敵がいない、フリーゾーンや空いているスペースでパスをもらう。

【4/10時: パスをもらうための動き出しとパスを出すタイミングについての課題解決】(動き方が分かる)

この画像は、フリーゾーンに入っているのに、パスを
もらうことができなかったよ。どうしてパスをもらうこ
とができなかったのかな。

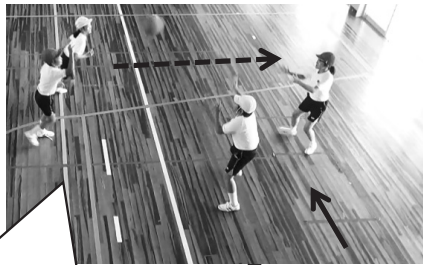
ボールをもっている
子が、パスを出すのが遅
いから、パスが通らない
よ。

フリーゾーンに入っ
ているけど、入るのが早
すぎて敵が来たからだ
よ。

課題となる子どもの動き



パスをもらうには、どんなタイミングで走り込めばよいのだろう。



味方がパスをもらった瞬間、スペースに走り込むといいな。

スペースに走り込んできた味方に、タイミングよくパスを出そう。

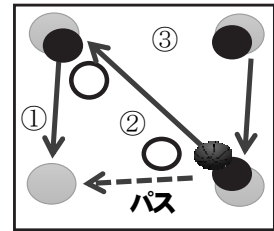
味方にパスが入った瞬間、タイミングよく走り込むとパスをもらうことができる。

【5/10時：動き出しとパスを出すタイミングの習熟を図る】(動きができる)

【タスクゲーム：3対2のパスゲーム】

3対2でパスを回していくゲーム。同じサークル内では、パスをもらうことができない。常に、違うサークルに動く必要がある。ボール保持者は、味方の動きを見てタイミングよくパスを出す。

子どもたちは、パスをもらうために空いているサークルを見付けて動く姿が多く見られた。メインゲームでは、空いているスペースに走り込む姿が見られた。



●…攻撃 ○…守備

(4) 結果と考察

子どもの姿

本単元の実践を通して子どもたちは、シュートを打つことができる位置取りや動き出しとパスを出すタイミングをつかみ、ゴール前での攻防を楽しむ姿が見られた。

指導内容(中核となる学習課題)	教材	指導方法
中核となる学習課題「シュートを打つための相手がいらない場所への位置取り」と「動き出す・パスを出すタイミング」は、指導内容を身に付ける上で、適切だった。	ハーフコートの3対2のゲームを教材として位置付けることで、フリーゾーンを設定して的入れ課題を容易にしたり、フリーゾーンにボールをどのように運び込むか工夫したりして、何度もゴール前の突破にチャレンジする姿が見られた。	「位置」「タイミング」という観点を設定し、シュートを打ちやすい位置取りやパスをもらうために動き出したり、パスを出したりするタイミングが分かるためにICTや掲示資料、発問などの指導方法の工夫が図れた。

(5) 実践の総括

体育授業についての調査を4回実施した。その結果、「体育授業の楽しさ」にかかわる項目では、9割を超える子どもたちが楽しさを味わうことができていた。楽しさの理由として、以下の内容を子どもたちが挙げていた。

- パスをもらう位置について、課題を解決することができた。
- パスをもらう位置が分かって、得点することができた。
→指導内容の明確化
- バスケットボールのルールが工夫されていて楽しい。
→運動教材の設定
- チームメイトとアドバイスし合い、協力して試合を楽しむことができた。
→指導方法の工夫(5つの観点の活用)

このように子どもたちが楽しさを味わい目標を達成する姿が見られたことから、3つの柱である授業のポイントが妥当であると考えられる。

7 本研究の成果と課題

(1) 成果

- ゴール型における指導内容を明確にするための道筋を設定したことで、次の学年や単元を見通しながら指導内容を整理することができた。
- 整理した指導内容を基に、今、この学年で、この実態で、どのような教材を設定することが妥当かを検討することができ、ねらいに沿った運動教材を設定できるようになってきた。
- 発達の段階に応じた5つの観点を活用させる働きかけを設定したことで、教師の価値付けや示範、助言・称賛などがより明確になった。また、子どもが観点を基に動きを改善したり、助言したりしながら学習課題を解決する姿が増えてきた。

(2) 課題

- 整理した指導内容を基に6年間の指導計画（ゴール型）を修正していく必要がある。
- ネット型やベースボール型でも、設定した授業のポイントを基に実践を積み重ねる必要がある。

8 おわりに

2008年の小学校学習指導要領の改訂では、その柱の一つに「指導内容の明確化」が示され、多くの指導内容の例示を参考にしながら授業づくりがなされている。しかしながら、子どもが体育授業の中で本当に運動のもつおもしろさに触れて、「とても楽しい」と評価してもらえる学習に導いていくためには、目標—内容—方法がつながった授業づくりが不可欠であることは周知のとおりである。本実践では、このような学習指導面の課題に向き合い、子どもたちが最も「授業が楽しい」と評価する割合が多いボール運動系の領域に絞って、何を一何で—どのように学ばせるのかといった授業づくりの在り方を検討し、高学年において実践した報告である。私たち教師は、体育の授業を通して、目の前の子どもたちに「これからもっと運動したい」「もっとできるようになりたい」という思いをもたせ、生涯にわたって運動に親しむための資質・能力を育成していくことを願ってやまない。今後は、当該学年（単元）で子どもが身に付けるべき内容は何か、それをどんな教材で学ばせるのかということはもちろんのこと、ゲームの状況に応じた教師の働きかけや単元計画の作成、到達度評価のみならず個人やチームの伸びや成長を的確に評価する学習評価のあり方などを研究・実践する必要がある。

9 付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成27年度研究紀要で発表した内容等に基づき、体育科教育において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

引用・参考文献

高橋健夫他編著(2002), 体育科教育学入門, 大修館書店

文部科学省(2008), 学習指導要領解説体育編, 東洋館出版

文部科学省(2010), 学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動, 東洋館出版

文部科学省(2014), 平成26年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書, 東京書籍, pp.130-131

鈴木理, 土田了輔, 廣瀬勝弘, 鈴木直樹 (2003), 「ゲーム構造からみた球技分類試論」, 体育・スポーツ哲学研究, 25-2, pp. 7-23

鈴木理(2012), ゲーム構造論に立つ授業づくりの総括, 体育科教育 60 (9), pp. 74-77

鈴木理・廣瀬勝弘・土田了輔・鈴木直樹 (2008), ボールゲームの課題解決過程の基礎的検討, 体育科教育学研究 24 (1), pp. 1-11

鈴木直樹・鈴木理, 土田了輔・廣瀬勝弘・松本大輔 (2010), だれもがプレイの楽しさを味わうことのできるボール運動・球技の授業づくり, 教育出版

松田恵示 (2009), 「戦術学習」から「局面学習」へ—新しいボール運動系の学習指導の考え方—, 体育科教育 57 (4), pp. 20-24

岩田靖 (1994), 教材づくりの意義と方法, 高橋健夫編, 体育授業を創る, 大修館書店, pp. 26-34

高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖 (2002), 体育科教育学入門, 大修館書店, pp. 73-80

鹿児島県総合教育センター指導資料 保健体育第 38 号(2012), よい体育授業を求めて—児童生徒と教師への意識調査を生かして—, 鹿児島県総合教育センター

鹿児島大学教育学部附属小学校 (2015) 研究紀要, 個の確立を目指す授業の創造Ⅳ～鹿児島の現状から自らの授業を問い直す～

